



## 森と人を 生かす知恵 156

### 森林の利用と存在の効用を知らしめる 「ぎふ木育」と「森林文化アカデミー」

岐阜県立森林文化アカデミー 学長 ● 涌井 史郎

17世紀。近代の曙と言われているその時代、欧州では科学する姿勢を濃厚にする傍ら、神と科学と自然の関係について、様々な見解が思想として登場した。

取り分けR・デカルトは自然は人間とは異なる数学的・機械的に動く存在として、精神と自然(物体)を二元論的に位置づけ、それが後世の科学的見地の常識となった。対してJ・ルソーのように一元論的な異論を唱えるごく少数の賢者達もいた。

こうしたそもそも論に西欧が強くこだわる理由は、キリスト教の教理と共に、彼らの大地が厳しい自然環境下にあり、必ずしも豊かではないことを示している。かの和辻哲郎が喝破したように、かの地には雑草というものが無い。森林も又多種が混交する森ではなく、限定種によって構成される森林により構成され、豊かさという観点からは、中東、中国といった草原と砂漠に覆われた大陸に営まれる国々とそう大きな違いはない。

そうした土地に生きるものは、自然から食料を常に採し出し、人間の強固な意志と行動、例えば、狩る或いは飼う、そ

して耕す、移動せねば飢えるという厳しい自然条件下に置かれていた。

故に天上界の星に絶対神の存在を投影し、天と地を結ぶ絶対神・その使徒・人間・自然といった強固な三角錐の秩序を神の秩序として長く認識してきた。よって自然は神が創造した神の荘園であるが故に、二元はより良い管理人、つまりステュワードシップを倫理的に備え自然に対峙するべきと考えてきた。

ところがアジアはどうだろうか。多種多様な生物種が存在し、ちよつとした工夫があれば、おのずから腹を満たすことが出来る。そればかりではない。住まいや道具も同様である。ましてや、温帯モンスーンに位置するこの列島の自然の多様性は、極めて多様な恵みにあふれている。我國の森林率は世界2位であり概ね68%と言われ、世界1位のフィンランドを例外とし、欧州を平均した森林率が46%であるという数字上の違い。人類が新石器時代に移行した時代にこの列島では、狩猟採取、そして小面積の耕作を行い、土器を創作し煮炊きという新たな調理法を編み出し、その傍らで自然信仰

という精神文化まで産み出した「縄文時代」が1万年近く続いた事実からもその違いが理解できよう。

しかし比較論では確かにそうした違いが理解できるが、その土地しか知らぬ人々は、いくら豊かと言っても、眼前に広がる森林と、それによって構成される生物多様性がもたらす資源が日常に展開していれば、あつて当たり前な存在としてしか映らない。日常の暮らしの全てが森林に支えられている事すら当然と理解をしてきた。観念的には森林をはじめ全ての自然物や災害を含めた動態全てに神性を感じ、信仰心を抱いてはいても、現実には存外粗略な扱いをしていた。その極致が急速な人口増を数えた江戸時代である。

そのころの国土の景観は「デフォルメの北斎、真実の広重」と言われた歌川重の東海道五十三次の作品に明らかである。そこに描かれた沿道の山々は殆どが禿山であり、僅かに松類が残された景観が江戸から京都にまで続く。人口増と共に、森林が日常のエネルギー消費を賄う薪や炭、建築資材の供給を担う産出地と

化したからである。

もとよりそうした安易な森林資源の浪費を戒めるために、「御留山」といった保護林や、神域として禁忌で守る努力はされたが、日々の暮らしの求めには叶わなかった。

そうは言っても世界には類例のない自然保護の思想と体系が、太古の昔からわが国に存在をしていた事実は見逃せない。何故ならば我が国の国土全般にその痕跡が野化され今に至っているからである。



野良と里を人間主体の二次自然「里山」や草地生態系としての「野辺」が囲

み、その外周部には神仏が居します「外山」「奥山」があり、最奥には神仏が降臨する「嶽」が存在するという世界観をそのまま投影した土地利用が全国に存在する。それは里山と野辺を境に、保全しながら自然を活用する空間と、保護を専らとして、災害や非常時に備える空間を神仏に託して守る思想と慣習を大切にしたコンサベーションエリアとプレザベーションエリアの双方を明確に区分してきた自然共生の叡智とでもいべき姿である。

自然を資本財として位置づけ、その存在を重視してきたわが国の伝統的文化観も、江戸時代の物理的乱伐こそ無いものの、現在、我が国の総人口の内、都市居住者が国際的統計では92%、農水省の2019年の試算では約8割を占める様相を呈するようになると、森林の存在効用は人々の意識から大きく乖離し、森林は山岳地帯の景観物、つまり非日常的存在の景色の一部としてしか人々の心象に映り込まない状況に至っている。

自然と常に対峙した日常。恵みも災いもそこに住む人々の自然への姿勢如何で決まるといふ緊張感が支配したかつての自然観ははるか彼方に遠のいてしまった。それでも森林は、日常を相変わらず飲料水や食、建築資材など多くの場面で支えている存在であることには変わりない。

加えて、今我々はこの地球上に存在し続けられるか否かが問われるほどの危機

に晒されている。そうした状況を招いた一大要因である二酸化炭素の増大。その吸収源として、森林以上に機能する自然的要素はなく、多くの生物種をその懷に抱え、生息を許す存在も又無い。巨視的に眺めれば、半径およそ6400 kmの大きさの地球上に、たった30 kmの厚みしかない地圏・水圏・大気圏に三分割された薄い膜状のエコシステムが創り出された生物圏。それは、森林を主役に多種多様な生物が生産・消費・分解といった作用を担い、エネルギーと物質の循環系を創り出し、安定した環境を永続的に生み出しているといふ良い。



ここに森林の価値を知らしめる教育「木育」の意味がある。ドイツでは「森の家 (Haus des Waldes)」と呼ばれる広大な森を背景にした市民の為の森林を知

る教育施設が整えられ、そこでは森林の地球環境に対する役割としての存在効用と、資材としての利用効用の双方を容易に体感し学べる。それをモデルに県立森林文化アカデミーに開設したのが「モリノス」である。

森林文化アカデミーは、一方で森林資源を対象により良い経済林経営を行う技術とマネージメント、さらに奥山・中山間に暮らす人々を経済的に支える為に、森林空間そのものの環境価値を高め、安全で安心に空間利用を楽しめるサービスビジネスの場としての機能を強化する教育、用材としての多岐に亘る先進的な建築や木工についての技術と創作力を身につける教育を2か年の専修教育を中心に、社会人に対しても継続的専門能力開発教育(CPD)を行い、森林並びに山村社会に寄与する人材教育とその開発に力を注いでいる。

しかし、その一方で極めて残念なことに、市井の方々におかれては、森林が果たす恩恵への感謝やその構造への理解が日々薄らいでいるのが現状である。そこで、岐阜県では平成15(2003)年、「緑の子ども会議」を皮切りに、幼児から大人まで幅広い年齢層を対象として、森林環境教育。つまり木育の取組みを県民協働で進めていくため、その目指す姿や理念を共有する「ぎふ木育30年ビジョン」を策定した。

その延長線上に、その後さらに「モリノス」、そして「木遊館」の整備が実現

され、双方が一体となって「ぎふ木育」の定着を図っている。都市の中で木の肌触りや香りを幼い頃から体感し、森の素材を幼少の感性に定着する事を目指した木遊館。森そのものの中に没入しエコシステムを目の当たりに感じ、理解をするモリノス。



そのいずれもが、森林県と呼ばれながらも森林への理解が遠のく岐阜に於いて可能な限り森林を身近に引き寄せ、理解し、その恩恵を感じ、やがては専門家のみならず県民が協働して、地球から地域に至るまで重要な貢献をしている森林の豊かさや健康を維持する為に「県民協働」の志を深められるよう「ぎふ木育」の拠点として、日々努力を傾けた。

●詳しい内容を知りたい方は TEL (0575) 35-2525 県立森林文化アカデミー まで